



幼児と天文学

森 下 博 三

「うわあー、すごいや、あれはなんという山なの。さっきの

ピコよりずっと大きいや！」

「僕にも見せろよ、兄ちゃんがんばるいや、僕よりずっと長く見てるんだから。はやく僕も見たいたいよ」

「待てよ、もう少しだよ…………」

昨年、ボール紙細工で簡単に作り上げた、六〇〇ミリの望遠鏡

をベランダの手すりにくくりつけて、月面観察をはじめたときの

わが家の風景である。長男は小学二年生、次男は満五歳。

のぞきを交替したところで、どの程度の天体に対しても興味を

もっているのか、テストしてみたくなった。

「兎が長いキネでお餅ついてなかつたかい」

長「あれはオトギ話だよ、そんなもの住んでるわけがないよ」

「どうして、だってお父さんはそう教わったんだがな」

長「だって月には空気がないから、生きものは生きておれないじゃないか」

「ふうん、じゃあ人間が月世界に旅行するときは、どうするん

だい」

長「それは宇宙服を着ていくんだよ」

「そんな服着てたら、歩いたり走ったりしくいだらうな」

長「そんなことないよ。月では重力が小さいから、ピョンとジャンプしても、地球より高く飛べるんだから、そしたら重力は地球の

六分の一なんだよ」

「ほほう、重力は六分の一なの、それは具合がいいや。じゃ

あ、お父さんは月世界でスポーツの新記録を作つて、チャンピオンになるかな」

次「そうだそうだ。そんなのするいや」

長「そんなのないや、そんなのみとめてくれないよ」

次「そうだそうだ。そんなのするいや」

長「ここで次男も話の仲間入りをする。これはおもしろくなつてき

たぞと内心笑いながら、

「じゃあ、今度は滋君に聞くがね、地球から月に行くにはどう

するんだい」

次「そりやー、ロケットで行くんだよ。すごいスピードなんだ

よ」

「だって、そんなすごいスピードで飛んでいたら、月に衝突

してしまうだろうな!」

次「パパはいやだな、逆噴射ロケットでゆっくり降りて着陸する

んだよ」と言いながら、プラモデルを持って来て姿勢制御の方法

までやって見せる。

「へエー、すごいんだな、行った人はいるの」

次「まだだよ、いまテストやってるんだ」

「だって、テレビで月の探検映画をやつてたよ」

次「あれは子ども用の作り話だよ。だけどそのうち行けるようになるんだよ」

「じゃあ、行けるようになつたら、パパも一ょに行くかな」

次「そりやー駄目にきまつてるよ」

次「どうして」

次「だって、パパはそのように訓練受けてないもの」

長「うん、だけどキット駄目だらうね」

「じゃー、お前たちは訓練受けて、行けるようになるかな」

長「うん、だけどキット駄目だらうね」

ちょっとと心配顔になつて、

次「僕は行けるよ」胸を張つて、

「ホー、お兄ちゃんは駄目だけど、滋君は行けるの、」

次「うん、僕は行くんだ」淡々として。

長「だけど、日本ではまだそんな大きなロケット作つてないよ

よ」ちょっととたしなめるような口調で、

「もし、ロケットで地球を飛び出して、今まで住んでいた地球

を見たらどうだらうな」

すると、いきいきと目をかがやかして、

長「きっと、きれいだよ。だって『地球は青かった』といつてた

よ」これは一本とられた格好だ。

「じゃー、この写真の凸凹はなんだい」

長「それは山だよ」

「この平らなどこるは？」

長 「それは海だよ」

「海なら水があるんだろう」

長 「水なんかないよ」

「どうして、水のない海ってのはないよ」

これでなんと返答するかと興味をもって、

長 「だって重力が小さいからみんな飛び散ってしまうんだよ」

「それでは月の昼や、夜の温度はどの位なんだろうな、ここみ

たいに住みよいのかな」

これらならそう簡単に答えられないだろう、と思つたが、目を丸

くして少々考えながら、

長 「昼はもうれつに暑いし、夜はすこく寒いんだよ。えーと、そ

うだ昼夜は一一四度以上だし、夜は零下一一六度にもなるんだ」

「ふうん、その温度の細かいのはいただけないな。だけどなん

で覚えたんだ、テレビか、それとも本」

といつて持つて来た。

.....

「さつき月には生物がないといったね」

長 「うん」

「それでは、他の星にはいないの、金星や土星や火星などに」

長 「いないよ」

「どうして？ 宇宙人がいるんだと聞いていたんだがな」

長 「あれは作り話だよ」と言下に言つてのける。

「空飛ぶ円盤は？」

長 「あれも本当なのかわからぬんだよ」

「もし本当だつたら」

長 「きっと頭のいいのが作つたんだろ」

.....

次「パパ、太陽は回つてるの」

「ああ」

次「そんなら月は回つていなんだね」

「どうして」

次「だって、いつも同じところばかりしか見えないんだもの」

「月はね、地球の周りを回りながら、地球と一緒に太陽の周りを回つてるんだよ。それに他の金星や土星や火星といった星も、一緒に回つてるんだ」

次「ふうん、じゃ一ちょうど土星の環のようになつてるんだね」

なるほど、これはおもしろい表現だなと思う。

この分なら、少しづつ根気よく宇宙のしくみについて話していく

つたとしても、ある程度は理解できるのではないかと感じさせられた。そして毎日見るもの、聞くものによって、よりよい環境を作り出すということが、どれだけ大切なものであるかということを知らされた次第である。

たしかに、私たちのこの年齢の頃には、一応天体についての疑問と興味を覚えたとしても、むしろ脳裏にあるものとしては、懐しい思い出としての夜の縁台でうちわを使いながら母が語ってくれた、天の川にかかる星々などの神話であったり、七夕祭りの短冊に願いごとを筆でしるしてお祈りをしたこと、それにススキの穂におだんごを備えての名月の観賞、(本音はこのだんごと、夜おそらくまで起きておれる方が目当てだったが)といったもので、およそ現実とは大きくかけ離れていたものである。

一方、父は三日月や満月に拍手を打って掛け、私にもそうさせたもので、そうすることが子ども心におとなになるための条件のようにさえ思えたものである。

ふとしたことから子どもたちと話ををするまでは、この位の年齢ではおとぎ話が主たるものであってもよいのではないかとさえ思われたが、わが子に教えられた『現実』とでもいふのだろうか、身のひきしまる思いである。

神話などによっての星座の勉強は、天体に対する認識と探究心

を高め、古来より受けつがれてきた星々に関する行事と相まって、大きな役割をはたしてきたことは疑うべきものでもない。今日のように毎日放映される宇宙もののテレビ番組や、子どもの本などの内容を考え入れたとき、もっと現実に即した題材をより多くとり入れてもよいような気がするし、ひいては常に新しいものが、正しいものを知りたがっている、現代の子の欲求を満たすことができるのではないかと思う次第である。

かえりみると、夢の星々による想像は文学的な宇宙を派生してきましたが、今や地球も一つの星であるといった、天体に対する認識は強く、日々進歩する科学によって宇宙内の距離を一層ちぢめてくれつつある。こうした環境の中に育まれた子等の中から、近い将来において、より進んだ科学の世界を切り開いてくれるであろう人物が、どしどし出てくるんだと考へたとき、私たちはただおざなりな一時のがれの方便によつて、その場をつくろうことなく、もっと親身になって手をたずさえ、新しき世代の礎となるよう努力したいと念願するものです。

きっと、あなた方の周囲にいるたくさんの方の中には、それこそ次代のノーベル賞組が、うようよしているんだといつても過言ではないでしょう。

あの、あどけない顔の中に!!

(東京大学・東京天文台)